



いざ九份へ

九份(ジォウフェン)は、台湾北部の港町基隆市の近郊、台北より1時間半~2時間ほどの距離、新北市瑞芳区に位置する山あいの町である。九份へは観光バスの乗り入れが制限されているため、途中で路線バスに乗り換え向かった。ガイドの胡さんの説明によると、九份の名前の由来は、その昔、9家族しか住んでいなかったからだとか。(※份は中国語で“ひとそりい、一人前、区分した一単位”などの意味を持つ)



車一台がギリギリの狭い道

九份の歴史

九份では19世紀末に金が発掘され、それに伴い発展し、リトル上海、リトル香港ともいわれる繁栄をほこった。日本統治時代は、日本の藤田組が金鉱の開発にかかわっていた。しかし、戦後は金の産出量の減少とともに街も廃れていき、1971年には金鉱が閉鎖され、人々から忘れられた街となった。そんな街が1989年、台湾でヒットした映画『非情城市』のロケ地となったことがきっかけで、一躍脚光を浴びることとなる。その後、スタジオジブリのアニメ『千と千尋の神隠し』のモデルになったとの噂もあり、日本での知名度も高まった。

九份の建物



九份の建物で特徴的なのは、布にアスファルトをしみこませた黒い屋根のつくりである。この地域は海からの湿った風が山にぶつかり、雨になる事が多く、その対策としてそのような屋根の建物が見られるとのこと。

昔からの建物も多く残されている。中でも有名なのが阿妹茶酒館である。ポストカードなどにも登場する、九份といえばここという場所だ。その昔は工場であった建物を改装し、喫茶店にしている。



九份茶坊。こちらも風格ある古い木造建築。1918年(大正時代)工場の所長宅として建てられたものらし

く、一時は廃墟だったところをリノベーションし、茶屋・アートスペースとして生まれ変わったもの。新北市の歴史建築として登録されている。



さいごに

今の九份の賑いからは想像もできないが、一時は本当に寂れた街であったよう。それが、1本の映画をきっかけにこれだけの観光地となったのはすごいことと思う。しかしながら、あまりにも観光地化され過ぎ、観光客目当ての似たような店が立ち並び、商売気の強い街になってしまっているのは少し残念に思う。

